



① 正面玄関

本館に並んだ図書イメージさせる外観です。外壁のレリーフは、彫刻家の新海竹蔵によって1930年に制作されました。左からそれぞれ「力・序・義・真・生・和・慈・玄」を表象しています。



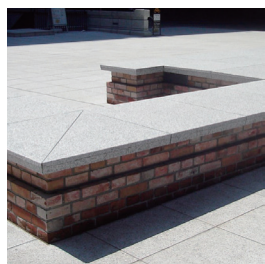
② 噴水

関東大震災の教訓を生かし、防火用水槽の役割も果たすものとして作られました。別館建設にあたって一時的に撤去されましたが、別館が完成した際に、再び元の場所に戻りました。



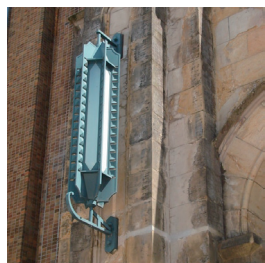
③ 加賀藩邸跡

別館建設の際に行った埋蔵文化財調査で、加賀藩邸の遺構が発掘されました。こちらの石はこの時発掘された排水溝の石組の一部分で、排水溝があった場所に並べて埋め込まれています。



④ 旧図書館跡

関東大震災で焼失した旧図書館のレンガ製基礎が発掘された位置に、基礎をかたどったベンチを設置しました。基礎の実物は、別館入口(文学部3号館側)近くにありますが。



⑤ ポーチ街灯

戦時中、金属不足を補うために拠出され、以降は取り外されたままになっていました。2009年に、図書館棟の他の玄関ポーチとともに復元されました。

東京大学附属図書館と総合図書館

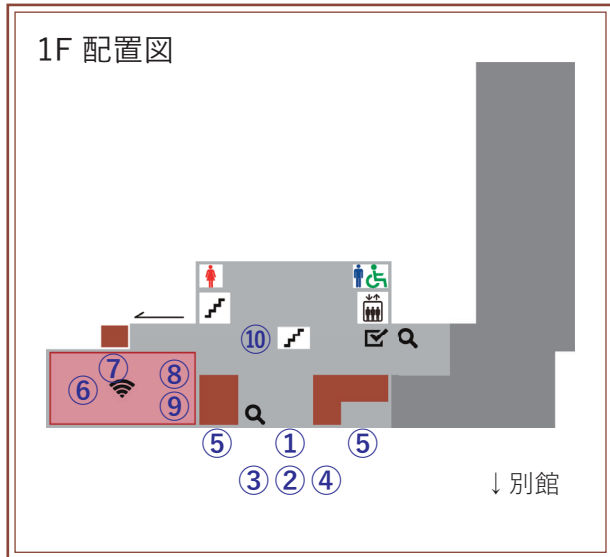
東京大学には、本郷キャンパスの総合図書館、駒場キャンパスの駒場図書館、柏キャンパスの柏図書館のほか、30あまりの部局図書館・室があり、全体として950万冊以上の図書を所蔵しています。これらを総称して、東京大学附属図書館と呼んでいます。附属図書館は多彩な図書館・室から構成されていますが、「共働する一つのシステム」として、大学における研究及び教育活動をサポートしています。

その中で、部局図書館・室は、主に研究を支援するとともに、各部局の特性に応じた学習支援機能を提供しています。対して、総合図書館は全ての学生に対して学習、総合的教養修得及び知的人格形成の場を提供することにより、部局図書館・室を下支えしつつ全学的な学習支援機能を担っています。

また現在、総合図書館は大改修工事(現在3分の2程度完了)を行っています。このタイミングにあわせ、新たな機能を持つ別館も建設されました。別館は本館前広場の地下にあり、地下1階がライブラリープラザ、地下2~4階が自動書庫になっています。自動書庫の最深部は地下46メートル、ビル12階ほどの深さがあり、約300万冊の収容能力があります。

建築&文物マップ

総合図書館 本館1F・2F



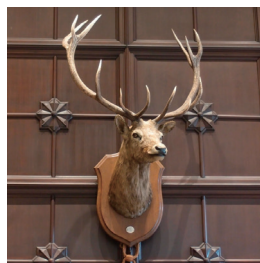
⑥ 記念室

総合図書館が再建された際、関東大震災からの復興を記念して設けられました。シャンデリアは2017年の改修工事で、創建当時のデザインを復元しました。



⑦ 南葵文庫の額

江戸最後の将軍徳川慶喜が揮毫した額です。関東大震災後、紀州徳川家当主徳川頼倫より、紀州徳川家蔵書を中心としたコレクション「南葵文庫」とともに寄贈されました。



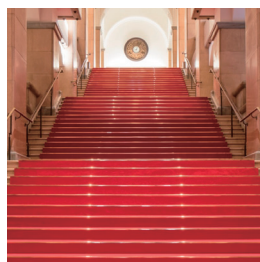
⑧ 鹿の剥製

英国王ジョージ5世から、東洋の動物標本を英国に寄贈した際のお返しとして、東京帝国大学に1913年寄贈されました。1923年の関東大震災の際には、火災の中から運び出されたそうです。



⑨ タゴール肖像画

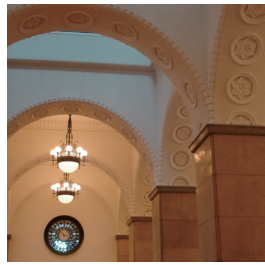
1957年、インドのネール首相が東京大学を訪問した際に寄贈されました。タゴールはインドの哲学者・詩人・音楽家・劇作家で、インド国歌の作詞・作曲もしています。



⑩ 大階段

復元により、吹き抜けから光が降り注ぐ明るい空間になりました。大階段周辺にはイタリア産の大理石が使われており、アンモナイトの化石がいくつも入っています。

マークのあるものは、創建当時のデザインに復元しました。



⑪ ホール

壁面に書架を設置して空間の広がりを活かし、創建当時の照明を復元しました。天井の彫刻は場所によって模様が異なります。



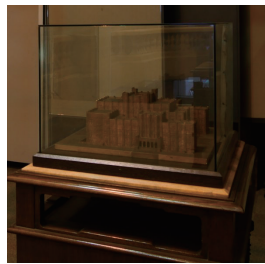
⑫ メダリオン

総合図書館を再建した翌年の1929年に、彫刻家の新海竹蔵によって制作されました。日本の四季を表現しており、向かって右側から春・夏・秋・冬を表していると言われています。



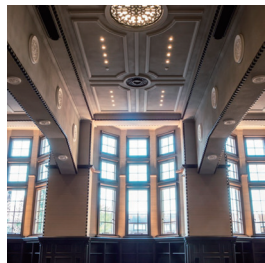
⑬ ロックフェラー氏からの書簡

ロックフェラー氏から当時の古由直総長に宛てた書簡です。この書簡には、図書館の復興のため、東京大学に400万円を寄付すると記されています。



⑭ 総合図書館の模型

東京大学はロックフェラー氏に対し、寄付のお礼として総合図書館の模型を贈りました。図書館にも、贈呈した模型と同じ型から作成された模型が置かれています。



⑮ 大閲覧室

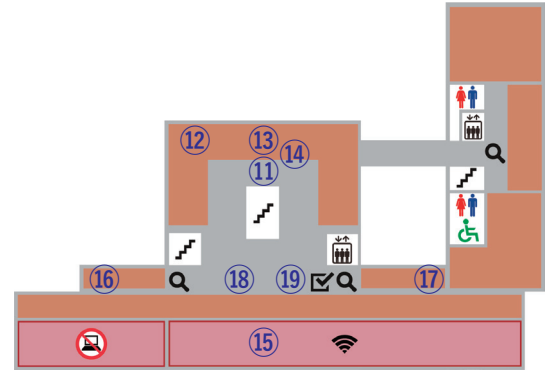
照明は創建当時のトップライトを復元しました。閲覧席は、90年の間使われている大机を少しずつ修復しながら使用する予定です。

総合図書館ができるまで
現在の総合図書館は関東大震災後に建てられました。1923年9月1日の関東大震災によって、図書館は全焼してしまいました。すると、翌1924年、図書館再建と図書復興のため、ジョン・ロックフェラー・ジュニア氏より400万円(現在の価値で約100億円)の寄付の申し出が寄せられます。東京大学は即座にこの申し出を受諾し、図書館を再建することを決定しました。内田祥三氏(後の東大総長)の設計監督の下で、具体的な新図書館の建設計画が進められました。1926年には工事に着手。完成は1928年で、同年12月1日に竣工式を迎えています。震災の教訓を生かし、鉄骨鉄筋コンクリート造りで頑強な構造を備え、地下1階・地上3階(中央部のみ5階)、内側には7層の書庫が設けられました。淡褐色のスクラッチ・タイルを貼った外壁と、ゴシック風の細部とアーチをもつ入口を用いた外観のデザインは、本郷キャンパスの他の建築物と調和がはかれています。その理由は、内田氏がキャンパス構想全体を手がけ、多くの建物を設計したことにあります。内田氏の設計した建物の中には、国の登録有形文化財に指定されているものもあります。

建築&文物マップ

総合図書館 本館3F・別館

3F 配置図



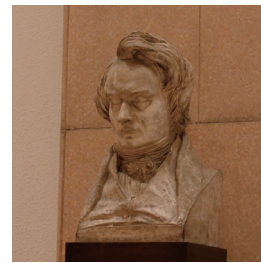
⑯ 小泉八雲のレリーフ

小泉八雲は東京大学文学部で教鞭をとりました。東京日希協会と松江市八雲会がギリシアに小泉八雲記念碑を贈った返礼として、1935年にギリシアの日希協会から寄贈されました。



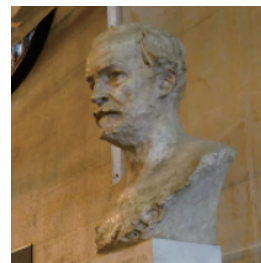
⑰ ブランデンのレリーフ

エドモンド・ブランデンは、1924年から約3年間、東京大学で英文学の教師をしました。彼の赴任期間には図書館の再建期間にあたり、総合図書館を題材にした詩を作っています。



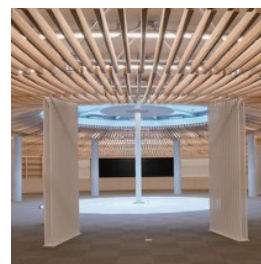
⑱ ユーゴの胸像

1933年に、パリ大学より寄贈されました。ビクトル・ユーゴーは『レ・ミゼラブル』の作者として知られている、フランスが誇る詩人・小説家です。



⑲ パスツールの胸像

1933年に、パリ大学より寄贈されました。ルイ・パスツールはフランスの化学者・微生物学者です。発酵の研究を行ったほか、ワクチンによる予防接種を成功させました。



⑳ ライブラリープラザ・自動書庫(別館)

ライブラリープラザは、グループ学習の場として作られた円形の学習スペースです。自動書庫には、資料の入った多数のコンテナが収められています。利用希望のある資料は、機械で本館まで運ばれます。

マークのあるものは、創建当時のデザインに復元しました。